2020年10月10日

「Realism for Social Sciences－経済学におけるリアリティと社会科学のためのリアリズム【日本経済学会】2020年度秋季大会企画セッション（討論会）」に参加して

名古屋柳城女子大学

村田康常

本日のセッション、お疲れ様でした。時間の制約があるとはいえ、見事な司会ぶりで、時間内で議論の全体をほぼ完全な形で終えることができたのが素晴らしかったです。

　この日本経済学会でのセッション（討論会）に参加し、先生方の議論が、来る（いつ来るのか、具体的な日程は未定ですが）日本ホワイトヘッド・プロセス学会につながり、やがてそれらがRFSSの思想運動の一契機として蓄積されていくという手応えと希望を抱きました。

私は発言しませんでしたが、さまざまな刺激を受けました。今日の議論を拝聴して感じたことを、ホワイトヘッド学会でのパネルセッションに向けてつないでいく意味でも、少しだけコメントします。

本日のセッションの第三部で議論されたPCR検査や医療の現場が直面している問題の背景には、福井先生のおっしゃるように自然の脅威というか、人間の予想の及ばない領域から襲来する脅威に対して何とか対応し、難局を乗りこえなければならないという状況があります。そうした現状では人間のコントロールを超えているような状況の背後に、合理的な理性によっては、あるいは私たちの（より不合理な感覚的な部分も含む）認識によっては汲み尽くせないリアリティがあるということが示されていると言えるかもしれません。

こうした難局に対して、人間の側は、さしあたってまず、これまでに用意されてきた制度や技術や習慣で対応しながら急場をしのぎつつ、その対応ではうまくいかない諸問題が生じてくることに対して、理性を用いて新たな対応策を開拓をしなければなりません。ここに、公共の場における知の在り方と学問の方法論という今日の問題の所在があります。学問の公的な在り方とは、未知の諸問題に私たちの社会が理性的に対応する方途を示すことにあると言えます。もちろん、こうした社会的な課題に応用される方法だけが学問の在り方ではありません。文学、哲学、心理学、教育学等々、さまざまな領域において、私たちが巻き込まれているこの状況の全体やその細部をさまざまな視野や切り口から捉える認識の仕方の提示が試みられるところに、学問の多様性があります。

哲学は、直面している課題に対して方策を提示するという適用、応用の面では非常に弱いですが、この課題を、そこに直面している視座からだけでなく、歴史的・思想史的な流れの中で立体視したり、存在論的・価値論的な問いのなかでその課題の背後を見通すようなまなざしや、認識の成立過程を問う認識論的な問いのなかで俯瞰的な視座といったものを試みに提供することはできると思います。

本日のセッションの終わりに塩谷先生がおっしゃったように、ここで学問が問題にしているリアリティは、もはや「主観から独立した対象」ではなく、われわれ自身を巻き込んでいる状況だといえます。主体とは、そのような巻き込まれの状況の中で生起するものだということです。学問の主体も、本来はそうした巻き込まれの中で生起するものなのですが、その唯一的な特殊性や一回性や視座の限定性を脱色して、一般的な視座を措定してそこに立脚するのが学問的な営為だといえます。学問的な主体も本来は汲み尽くせないリアリティのうちに巻き込まれているのだ、ということを示すのが、今回のコロナ禍のような社会的な大きな課題に直面した状況でしょう。私たちは、そもそも私たちの認識や既存の学問によっては汲み尽くせないリアリティに巻き込まれていますが、コロナ禍はそれを見せつける契機ともなりました。このようなリアリティは、葛城先生が整理されたバスカーによる存在の３領域の区分でいえば、3の汲み尽くせないrealの領域に湧きおこって２のacutualの領域における諸事象を形成しつつ1のexperienceの領域へと進入してくるものであり、コロナ禍がもたらしたさまざまな課題はそのようなrealの領域の流動のなかで湧きおこった諸事象がactualの領域を新たに形成し、exerienceの領域を変化させて、これまでの知や制度や秩序によっては対応し難い難局を形成している、と捉えることもできるかもしれません。

私たちが汲み尽くせないリアリティに巻き込まれているというその巻き込まれ方は、私たちのこれまでの制度や技術や習慣や知識では対応しきれない、解決しきれない問題に私たちが直面している、といった仕方で、にわかに私たちの公的な課題として浮上し、私的な認識の焦点となってきました。たとえばPCR検査の問題などは、こうした問題の具体的な提示ですが、それを学問に従事する専門家は、学問や人間の理性に対して、これは合理的に解決しならない問題である、という問題提起として受け止めるべきだという期待や要請が公共の場にはあります。

汲み尽くせないリアリティが、にわかに、暴力的な脅威としてexperienceの領域や認識の領域で課題になってきたとき、理性的な対応が求められるのが、文明化された社会です。そこでは、理性は、まず、私たちが巻き込まれている経験的なリアリティのうちにある規則性や秩序を見いだし、そこに対応する方策を検討するでしょう。さしあたってまず、これまでの知のストックを組み直して対応するというのが、理性の合理的な対処ですが、私たちが直面している難局がそうしたストックの組み直しでは対応できないかもしれない問題だということが明らかになってきたとき、より創造的な理性の働きが求められます。それはどのような知なのでしょうか。そういう知は合理性とは異なる冒険的要素がメインとなります。

観念の冒険というホワイトヘッドの考え方がそこにあります。そして、最後に私見を述べますが、そういう冒険的な知の在り方というのは、直接に経験する領域を超え出ていく想像力の飛躍という「遊び」の性格をメインにした精神だということ、ホワイトヘッドもそれを示唆しているということ、しかしそういう創造的で、既成の制度や秩序に拘泥しない遊戯的な精神は、即効性のある使い勝手のよい解決方法をすぐに提示できるというような保証はまったくできないということ、だからこそ、真面目さや合理性によって効率や有効性や作業スピードを高める努力をこの遊戯的な精神の探求や試みに伴わせることが必要なのでしょう。合理性によって強められた想像力、ということをホワイトヘッドも主著Process and Realityの第1部第1章第2節で自分自身の思弁哲学の唯一の方法として主張しています。しかし、哲学の作業スピードも公共の財として役に立つような一般的な理解の浸透も課題への有効な適用もとても遅く、そのためには一時代を必要とするほどに遅く、「哲学はゆっくり働く」（ホワイトヘッド, Science and the Modern World, 序論）ということが、この学問があまり役に立たない最大の理由になっていると思われます。

　ホワイトヘッドも、ルーマンの「縮減」とよく似たことを随所で主張しています。ホワイトヘッドの科学論・方法論に見られる「縮減」に通じる議論を素描すると、意識は、経験からの選択と強調であり、理論は、その意識からのさらなる選択と強調によって合理的秩序を見いだしていくことによって形成され、適用とは、そうした合理的秩序によって強化された意識的な認識を直接経験の領域での認識と判断に用いることだ、といったあらすじになるでしょう。直接経験をもっとも広くとらえたホワイトヘッドの術語は「感じ」(feeling)ですが、この感じにおいては、現実世界の全体が与件になっており、現実世界のうちで意識によって焦点化された領域だけでなく、その周囲や背後に広がる明晰でない領域全体が、意識化されないけれども経験においてはそこに巻き込まれ、そこからその経験主体も生成してくるような場として与えられており、そのような所与性こそが、最も広い意味での「感じ」だということを彼は主張しています。感じにおいては、学問する主体は、意識化され理論化された領域だけでなく、それらがそこから由来したようなより背後的で焦点化されていない現実世界の全体という茫洋とした彼方も暗に「感じ」ている、つまりそこに巻き込まれている、と言えると思います。直接経験におけるこのような感じの茫漠とした広がりが、経験の、認識の、そして理論的な学問の、背後的な前提となり、それらが形成される母体となっているというのが、ホワイトヘッドの学問論のベースだと思います。個々の合理的な理論的図式だけでは捉えられないものが膨大に残されて渦動しているというのが、直接経験においてもっとも広く感じられているリアリティの原初相だ、ということです。個々の理論は、それらの膨大で茫漠としたリアリティの渦動の中から、ある視点から一部を焦点化し合理的な秩序によって明晰化し一般化したものだという側面を避けがたく有していて、そうした制約を忘れてこの理論的な構図を私たちがそこに巻き込まれてそこに生きている現実だと見なすところに具体性を置き違える誤謬の問題なども生じるというのが、ホワイトヘッドの科学批判の１つのポイントです。

ここから、私は、既存の理論やその新しい組み合わせだけでは対応できないような直接経験の新しい事態が生じてきたときには、学問する主体は新しい認識の枠組みを探究する遊戯的な精神を発揮することが求められるし、そういう事態に備えて学問共同体は平時から遊戯的な精神が働く非効率的で非合理的で非適用的で直接的には役に立たない無益な活動性をどこかで保持しておかなければならないのだと思います。

・・・といったことを、本日のセッションを拝聴しながら考えました。本日は何の貢献もできませんでしたので、覚え書のつもりで書き留めておきます。